

〈資料〉

歌唱場面におけるマスク着用に対する意識 —保育士・幼稚園教諭および小学校教員養成課程の学生を 対象として—

田中 樹里

(人間学部子ども学科／児童教育学科)

Awareness of Wearing Masks in Singing Scenes - Nursery Teachers, Kindergarten Teachers, and Elementary School Teacher Training Course Students -

Juri TANAKA

(Department of Child Studies/Department of Childhood Education and Welfare,
Faculty of Human Science)

本研究の目的は、保育士・幼稚園教諭および小学校教員養成課程の学生を対象に歌唱場面におけるマスク着用に対する意識を明らかにすることである。コロナ禍で対面授業を実施した2021年度の「音楽表現基礎2」と「音楽実技」の履修者を対象に質問紙による調査を行い、126名（子ども学科102名、児童教育学科24名）より回答を得た。調査の結果、マスクの着用場面についてコロナ禍以前は「風邪などの病気のとき」など着用場面は限られていたが、調査時点では就寝と在宅時以外はほぼマスクを着用していた。マスクの着用感を日常生活と歌唱時で比較したところ、歌唱時は「自分の声が聞こえづらい」「相手の声が聞こえづらい」「言葉が伝わりづらい」と感じていた。歌唱時のマスク着用を選べる場合には、「とる」と「つける」がそれぞれ約40%であった。感染症対策ではマスクをつけるのが適切であると考える者と、歌唱のしやすさを優先してマスクやフェイスシールドを着用したくない者がいた。

キーワード：歌唱、マスク、意識、感染症対策、保育士・幼稚園教諭養成課程、小学校教員養成課程

1. 緒言

2020年初頭の新型コロナウイルス感染症（coronavirus disease 2019；COVID-19）の世界的流行により、生活のあらゆる場面をはじめ、学習の場面においてもさまざまな制約が余儀なくされている。「音楽」に関する内容の中でも歌唱活動は、日常生活以上に飛沫感染のリスクが懸念されることから感染症対策が特に求められる分野のひとつといえる。本学においても保育士・幼稚園教諭および小学

校教諭の免許取得を目指す学生の音楽科目では歌唱を取り上げ、文部科学省による「学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル～「学校の新しい生活様式」～」(文部科学省, 2022)等によるガイドラインを参照し、歌唱時における飛沫抑制効果のあるマスクとフェイスシールド(齊藤, 2021)の着用、学生間にビニールシートの設置、空気清浄機の稼働、消毒や換気等の対策を行いながら、授業を実施してきた。現在も新型コロナウイルス感染症の終息の目途はたっており、今後

も何らかの理由により、制限のある学習活動を展開する必要が生じる可能性も否定できない。マスク着用に関しては、現場では模範歌唱の分かりづらさや、児童や生徒の息のしづらさ等の問題点も指摘されている（上野，2022）。

そこで、本研究では2021年度の授業実践における感染症対策を例に、保育士・幼稚園教諭および小学校教員養成課程の学生を対象として歌唱場面におけるマスク着用に対する意識を明らかにすることを目的とし、履修者に対して質問紙調査を実施した。学生のマスク等の着用に対する実態を捉えるとともに、今後の授業展開のための基礎資料としたい。

2. 研究方法

(1) 調査の実施方法

調査は質問紙により2021年7月と2021年12月に行なった。調査対象者は本学子ども学科、児童教育学科2年生で、2021年度の「音楽表現基礎2」と「音楽実技」の履修者を対象とした。調査は無記名式で実施し、調査の目的およびデータは研究目的のみに使用すること、回答は任意であり回答をしない場合に不利益を被ることはないこと、質問紙の回答を持って調査への同意とみなすことを事前に説明した。

(2) 調査内容

授業時に行なった感染症対策の例を図1に示す。

文部科学省による「学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル～「学校の新しい生活様式」～」（文部科学省，2022）等によるガイドラインを参照し、手洗い、手指の消毒、検温、換気（窓やドアの開放）の徹底、空気清浄機（ML教室）やサーキュレーターの導入等の対策を行った。歌唱時は、清潔なマスクとフェイスシールドを着用し、必要場面でビニールシートを用いた。全体で一斉に歌唱することや対面での歌唱を避け、座席を指定し、少人数で十分なディスタンスをとれるようにした。授業後はフェイスシールド、ビニールシート、譜面台、ピアノ等の消毒を行った。

授業の状況を踏まえ、調査項目は「マスクの着用場面」と「現在、マスクを着用する時に感じること」で構成した。

「マスクの着用場面」では、コロナ禍以前と現在



図1 感染対策を行った授業の様子

のマスク着用場面に違いがあるか、実態を明らかにするため「1. コロナ禍以前のマスクの着用場面」「2. 現在のマスクの着用場面」の2つの場面について選択肢9項目（表1）より複数回答とし、選択肢以外については自由記述とした。

次に「現在、マスクを着用する時に感じること」について、日常生活と歌唱時のマスク着用感の違い、授業の歌唱場面でのマスク着用について、授業での感染対策に対する意識を明らかにしようと考えた。調査項目は以下「1. 日常生活でマスク着用の時に感じていること」「2. マスクをして歌う時に感じること」「3. 歌う時にマスクを着用できるかどうかを選べる場合、あなたはどうしますか」「4. 本授業では、歌を歌う時に感染症対策として各自のマスク着用に加え、フェイスシールドとビニールシートを使用しました。授業での経験を踏まえて感染症対策として適切であるとあなたが考えるものを一つ選び、その理由を教えてください」とした。

「1. 日常生活でマスク着用の時に感じていること」「2. マスクをして歌う時に感じること」では以下7項目（表2）について「あてはまる」「ややあてはまる」「どちらでもない」「あまりあてはまらない

表1 マスクの着用場面

選択肢（複数回答可）
①風邪などの病気の時
②体調不良の時
③寝ている時
④風邪などの予防
⑤出かける時
⑥電車やバス
⑦人と会う時
⑧大学にいる時
⑨在宅している時

表2 マスク着用を感じるごと

回答項目
①息苦しい
②暑い
③相手の顔が見えない
④相手の表情がわからない
⑤自分の声が聞こえづらい
⑥相手の声が聞こえづらい
⑦言葉が伝わりづらい

い」の5段階により回答を得た。7項目以外は自由記述とした。

「3. 歌う時にマスクを着用できるかどうかを選べる場合、あなたは どうしますか」では「とる、つける、わからない」より選択し、理由を自由記述とした。

「4. 本授業では、歌を歌う時に感染症対策として各自のマスク着用に加え、フェイスシールドとビニールシートを使用しました。授業での経験を踏まえて感染症対策として適切であるとあなたが考えるものを一つ選び、その理由を教えてください」では以下7項目(表3)と理由を自由記述とした。選択肢以外は自由記述で回答を得た。

(3) 解析方法

すべての項目について単純集計をした後、「マスクの着用場面」については回答者全体の平均値を算

表3 授業時の感染症対策

選択肢
マスクのみ
フェイスシールドのみ
ビニールシートのみ
マスクとフェイスシールド
フェイスシールドとビニールシート
マスクとフェイスシールドとビニールシート

出した後、平均の差の検定(対応のあるt検定)を行った。

3. 結果

(1) 基本属性

回答者数は126名(子ども学科102人;男性7人;女性95人、児童教育学科24名;男性11人;女性12人;回答なし1人)であった。

(2) マスクの着用場面

「1. コロナ禍以前のマスクの着用場面」と「2. 現在のマスクの着用場面」について、結果を図2に示す。コロナ禍以前は病気や体調不良のときにマスクを着用していたが、現在は就寝や在宅時以外はほぼマスクを着用していることがわかった。選択肢以外の場面は、コロナ禍以前は花粉症や肌荒れを隠すための着用、現在はそれらに加えて人込みやカラオケ、他者との会話や運動時が挙げられた。

(3) 現在、マスクを着用する時に感じるごと

「1. 日常生活でマスク着用の時に感じていること」および「2. マスクをして歌う時に感じるごと」の結果を表4に示す。回答は「あてはまる」1点、「ややあてはまる」2点、「どちらでもない」3点、「あまりあてはまらない」4点、「あてはまらない」5点を与え、設問ごとに平均点を算出した。日常生活では「暑い」「息苦しい」「自分の声が聞こえづらい」、歌唱時では「自分の声が聞こえづらい」「相手の声が聞こえづらい」「息苦しい」の得点が低かった。日常生活と歌唱時について対応のあるt検定の結果、4項目に有意差が認められ、「暑い」は日常生活、「自分の声が聞こえづらい」「相手の声が聞こえづらい」「言葉が伝わりづらい」は歌唱時の方が得

表4 マスク着用時に感じるごと(日常生活と歌唱時の比較)

	日常生活		歌唱時		t 値	検定結果
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
息苦しい	1.43	0.75	1.55	0.93	-1.39	n.s.
暑い	1.30	0.70	1.67	0.97	-4.22	***
相手の顔が見えない	1.82	0.93	1.98	0.95	-1.83	n.s.
相手の表情がわからない	1.70	0.85	1.80	0.84	-1.25	n.s.
自分の声が聞こえづらい	1.63	0.90	1.38	0.68	3.36	**
相手の声が聞こえづらい	1.67	0.88	1.40	0.67	3.19	**
言葉が伝わりづらい	1.83	0.95	1.45	0.64	4.36	***

p < 0.01, *p < 0.001

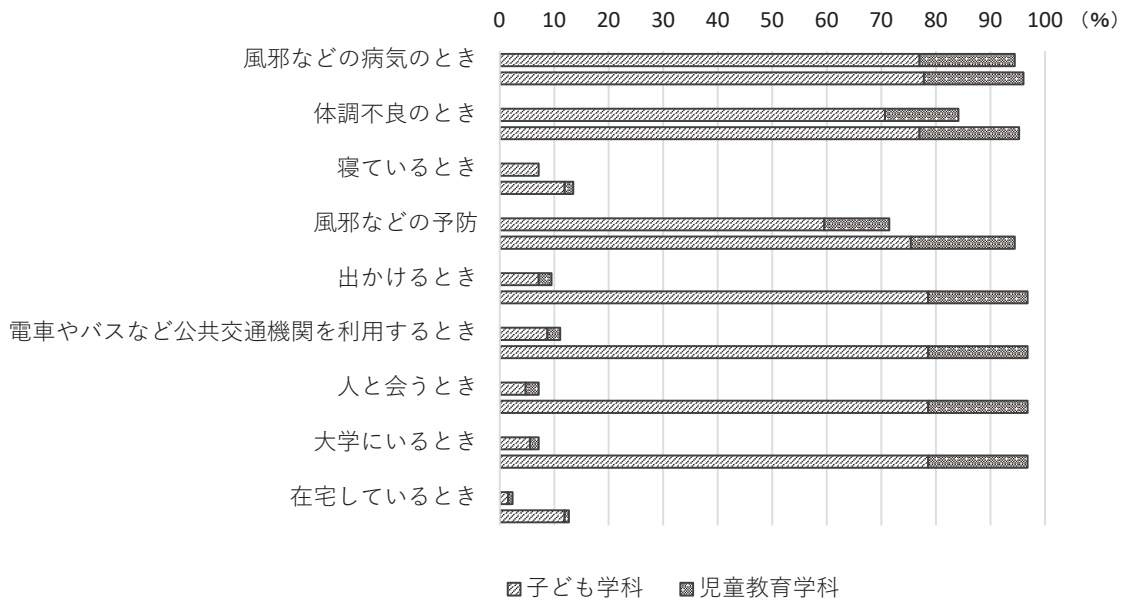


図2 マスクの着用場面 (上段；コロナ禍以前、下段；コロナ後)

点が低かった。次に、「3. 歌う時にマスクを着用できるかどうかを選べる場合、あなたはどのようにしますか」に対する結果は、マスクを「とる」39%、「つける」37%、「わからない」25%であった。「とる」を選択した者が多くの方が挙げている理由は「マスクがあると歌いにくい」であった。一方で、「つける」の理由は、「感染のリスク」と「他の人がつけているため、外せない」があげられた。また、少数ではあるが「マスクを取りたくない」「顔を見られたくない」という者もいた。マスクを着用するか「わからない」と答えた25%の人は「状況次第」「周りに合わせる」「何が正しいかわからない」「感染症対策がきちんとされているか不安」等の意見であった。最後に「4. 本授業では、歌を歌う時に感染症対策として各自のマスク着用に加え、フェイスシールドとビニールシートを使用しました。授業での経験を踏まえて感染症対策として適切であるとあなたが考えるものを一つ選び、その理由を教えてください」に対する結果を図3に示す。多い順から「マスクとフェイスシールドとビニールシート」32%、「マスクのみ」27%、「マスクとフェイスシールド」21%であった。理由については、「マスクとフェイスシールドとビニールシート」について「出来ることは全てした方が良い」「歌唱はリスクが高い」という意見がある一方で、「(ビニールシートはあった方が良いが)ビニールシートは音を遮るのが気になる」というもの

もあった。「マスクのみ」の者は「楽に歌いたい」「マスクで十分」という意見と、「フェイスシールドは曇る」「マスクとフェイスシールドでは熱中症になる」「着脱に時間がかかる」等、フェイスシールドの扱いにくさを挙げた人が多かった。「マスクとフェイスシールド」の人では「二重に対策する方が良い」「自分と相手の両方に効果がある」とした。「その他」では「マスクとビニールシートが良い」「ディスタンスと換気をすれば問題ない」という意見もあった。

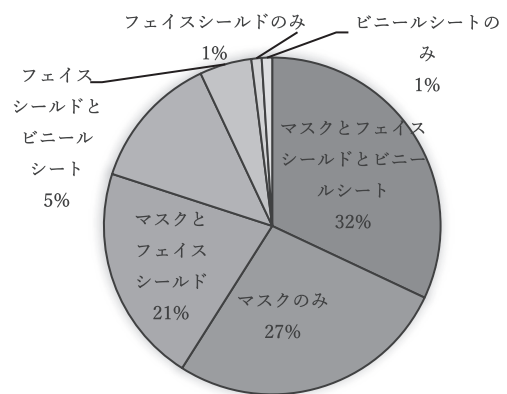


図3 適切と考える感染対策

4. 考察

(1) マスクの着用場面

マスクの着用状況について、コロナ禍以前とコロナ禍の学生のマスク着用場面を比較すると、コロナ

禍以前は風邪や体調不良等の限られた場面でマスクを着用していたが、コロナ禍では就寝時と在宅時以外のほぼ全ての時間に大部分の人がマスクを着用していることが分かる。したがって、マスクの着用習慣はコロナ禍による大きな変化であり、マスクの着用による歌唱の学習への影響とマスクが日常的になることによって起こりうる意識の変化を捉えることが重要であるといえる。

(2) 現在、マスクを着用する時に感じること

日常生活と歌唱時のマスク着用の感じ方の比較した結果、「自分の声が聞こえづらい」「相手の声が聞こえづらい」、「言葉が伝わりづらい」は日常生活よりも歌唱時に感じることから、マスクの着用によって声や言葉の伝わりづらさを感じているといえる。また、「息苦しい」は歌唱のしづらさに繋がると推察される。一方、「相手の顔が見えない（顔が判別できない）」「相手の表情がわからない」では有意差が認められず、日常場面でも歌唱場面でも顔や表情についてはあまり意識されていないことが明らかになった。マスク着用に関しては、先行研究の音楽分野における模範歌唱や、子どもの息のしづらさの問題だけでなく、マスクによって口元を遮蔽した状態は表情認知を困難にさせる可能性があること(木下, 2022) やマスク着用の影響として高音が聞き取りにくくなること(北島, 2012)、保育者のマスク着用に関する問題(西館, 2016)等も指摘されている。歌唱においても歌詞や楽曲の内容への理解や共感を相手に促すという点から顔や表情は重要な要素であり、学生は幼児や児童に向けてどのような歌唱法が適切かを学ぶ段階である。顔や表情の重要性について、マスクを着用した状態で歌唱指導を受ける学生に対しては、特に丁寧に指導していく必要があるといえる。幼児や児童に向けてマスク着用時にも声や表情が重要であることを、学生に認識させていく必要があると考える。

次に、マスクの着用を選べる状況を想定した場合の着用希望について、「とる」と「つける」はほぼ同じ割合であった。マスクの着用によって歌いづらいと感じる者がいる一方で感染のリスクや他者との関係性からつけるとした者もいたことから、マスクに対する世論が学生のマスク着用への意識に影響を与えていると推察される。さらに、「顔を見られた

くない」「マスクをとりたくない」は、マスクの着用が日常的になる中で生じた理由と考えられる。将来的にマスクの着用が必要なくなった段階では、マスクを外すことに対する不安感のある者への対応も求められるといえる。

最後に、歌唱時に適切と考える感染対策について、授業で実践した感染対策である「マスク+フェイスシールド+ビニールシート」が最も支持されていたことから、授業での感染対策は適切と捉えられていたことが分かる。さらに、「マスクのみ」、「マスクとフェイスシールド」といったマスクの着用を含む方法が支持されていることから、マスクの着用は負担の少ない感染症対策であるといえる。一方、フェイスシールドは曇ることや着脱に手間がかかること、ビニールシートは音が遮られることを問題点として挙げている者がおり、着脱のしやすさや音の通りやすさが重要であるといえる。さらに、「出来ることは全てした方が良い」「歌唱はリスクが高い」といった意見が見られたことから、感染症対策には物理的な側面だけではなく、歌唱する際の心理的な負担を軽減させる側面があることを理解したうえで、学習環境を整える必要があると考える。

5. おわりに

本研究によって、多くの学生はコロナ禍によってマスクを着用するようになったこと、歌唱の場面では日常生活よりも声が伝わりづらいつ感じていること、歌唱場面の感染症対策としてマスクの着用が受け入れられていることが明らかになった。マスクの着用は数ある感染症対策ツールの中でも最も気軽に受け入れやすいツールであるとともに、歌唱のしづらさがあるものの、感染症対策の中でも最も気軽に受け入れやすい方法であるといえる。新型コロナウイルスが収まらない限り、日本ではしばらくマスクを着用した生活が続くと考えられるが、幼児や児童に向けた歌唱技術の習得は、マスクの着用の有無に関わらず、行っていく必要がある。特に、マスクで隠れてしまう表情の重要性の指導は丁寧にやる必要性が示唆された。以上のことを踏まえて、今後も感染症対策を実施する中での授業の在り方を模索していきたい。本研究では、大学で授業を受ける立場として感染症対策への意識を調査したが、子どもと歌

唱をする上で望ましい感染症対策については明らかにしていない。現場で子どもと関わるという視点は今後の課題であると考えている。

謝辞

調査に協力していただいた子ども学科2年生、児童教育学科2年生にお礼を申し上げます。

《引用文献》

- 上野正人・岩崎靖就・長谷川紗耶（2022）「コロナ禍での学校授業における有効な歌唱指導方法に関する一考察－「課題研究フィールドワーク」における修士課程学生の学校実習を通して－」『上越教育大学研究紀要』, 42, 245-254.
- 北島万裕子・加悦美恵・飯野矢住代（2012）「マスクを着用した看護師の声は患者にどのような音として聞こえているのか」, 『日本看護技術学会誌』, 11（2）, 48-54.
- 木下シエナ・下村義弘・日比野治雄（2022）「マスクの着用が表情認知に及ぼす影響」, 『人間工学』, 58（Supplement）, 1G4-04.
- 齊藤忠彦・田島達也・岩崎博道・岡本隆太・高橋幸三・財満健史・大脇雅直（2021）「歌唱活動における飛沫感染対策に関わる検討－飛沫可視化による飛沫防護具の比較などの検証実験を通して－」『音楽教育学』, 51（1）, 25-35.
- 西館有沙（2016）「マスク着用が保育に及ぼす影響に関する保育者の認識」, 『富山大学人間発達科学部紀要』, 10（2）, 125-130.
- 文部科学省（2022）「学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル～「学校の新しい生活様式」～（2022.4.1 Ver.8）」
https://www.mext.go.jp/a_menu/coronavirus/mext_00029.html（2022.10.15 最終閲覧）.
- （受付日：2022年10月17日、受理日：2022年12月21日）